

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任副委員長選挙所信表明用紙

(五枚中の一)

中央常任副委員長候補

文学部 二回生

神足 颯人

この度、二〇二一年度中央常任副委員長に立候補させていただくこととなりました。文学部二回生の神足颯人です。

前回の常任委員長選挙後の私は、自らのこれまでの歩みを全否定せざるを得ない状態となっておりました。私は、学友会という組織のために、リーダー不在の状況となることを何としても防ぐべく、やむにやまれぬ思いで常任委員長に立候補したのです。二回生が立候補する異例の事態となっていることを憂う先輩がいらつしやることを、切に願うての立候補でした。だからこそ、相談に乗ってくださったっていた灌谷前常任委員長から、先日、佐藤颯平候補の出馬表明を伺ったとき、すぐに佐藤候補とお話することを決めました。佐藤候補は、昨年度末に神足が落選し委員長不在となった学友会を憂いていらつしやいました。そして、今回この状況を打破するために立候補されるこのことで、私に推薦人になってほしいと頼んでくださいました。私の落選が、この組織が再び前に大きく進み出すためのきっかけとなれたのならば、一般の私の志は無駄ではなかったと、そう思えました。思いがカタチになったのだと、そう確信し、私はこれからも全力でこの先輩をサポートさせていただきたいと思うようになりました。そして、この度常任副委員長に立候補しました。

常任委員長選挙後の私は文学部自治会委員長としての最後の職責を果たすため、体制や想いの引き継ぎに全力で取り組んでおりました。最近では、執行委員とオリター団との関係構築をお手伝いしたり、委員長代行のサポートをさせていただいたりしています。この学友会という組織にもらったご恩とご縁への、恩返しとして私にできることは、それだけだと思っていたのです。しかし、副委員長選挙が公示され、私を必要としてくださいと先輩が、声をかけてくださいました。今ここに所信表明をさせていただけることに深く感謝し、新しい私の想いについて述べさせていただきたいと思えます。

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任副委員長選挙所信表明用紙

(五枚中の二)

私は入学して間もない一回生の四月から文学部自治会の執行委員となり、広報担当、委員長代行を経験しました。二回生次には文学部自治会委員長を務めました。また、一回生の八月から今年一月まで、中央事務局調査企画部員としても活動してきました。

文学部自治会執行委員として、学生大会の運営と五者懇談会、文学部独自の活動やオリター団との連携等について先輩方から学ばせていただき、私は委員長としてそれらをさらに発展させることを目指して委員長代行に就任しました。そして、就任後は「文学部生のための自治会」という理念を掲げ、自治会活動を学部生目線で捉え直すことに取り組みました。学部生目線とは、文学部の代表を務めさせていただいていることを最重要とした考え方のことで、文学部生全体の利益を追求するものです。そこで、第一に私が重視したのは情宣の強化です。文学部自治会という組織自体の周知を図るとともに、学部生目線の頼れる存在だと認識してもらえような情報発信を心がけました。まずは自治会の存在を知ってもらうことで、より多くの学部生の声を集めることに繋がると思っています。Twitterの公式アカウントのフォロワーは400人増え1200人強となりました。公式Instagramも新入生を中心にたくさんの方が見てくれております。映像学部自治会と連携したプロモーションムービー作成も、私が主導した情宣強化策のひとつでしたが、残念ながら緊急事態宣言によってプロジェクトが凍結となってしまいました。しかし、ここで作られた二学部間の連携は決して消えてはならず、次世代の委員長代行へと受け継がれております。第二に重視したのが、時勢への対応です。私は、昨年9月にコロナ禍を見据えて早々に自治会規約改正のための学生大会を開催しました。また、それからはオリター団によるサポート体制が失われないように留意し、環境整備を行いました。ここでも学部生目線が重要です。コロナ禍でのピアサポートを例に挙げます。中央委員会でオリター団の活動について話題となるのは、年間方針を見ているとき以外にほぼありません。しかし、文学部生としては、複雑な履修登録や大学生活の不安などを少しでも解消すべく、オリター団の継続的活動が急務だと考えました。私はオリター事務局（文学部のオリター団執行部）とたびたび協議し、なんとか独自の企画である文フェスの開催を目指しました。最終的にはコロナウイルスの感染拡大

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任副委員長選挙所信表明用紙

(五枚中の三)

もあつてなかなか難しい時期もありましたが、なんとか秋学期での対面サブゼミ実施までサポートをすることができました。中央委では話題に上がりにくい、各パート独自の活動をこのように重視する学部生目線が、各学部委員長には求められていたと思います。

私が今まで学友会活動を行ってきた学んだのは、「維持」の大切さと難しさです。ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』に登場する赤の女王はこう述べました。「その場にとどまるためには、全力で走り続けなければならない (It takes all the running you can do, to keep in the same place.)」つまり、「Keep (維持)」とは単に同じ場所にいることではなく、時代の趨勢を予期し、新しい時代に自らを常に合わせ続けることだったのです。学友会という組織を維持し続けるためには、目まぐるしく変化する時代に合わせた組織へと、常にアップデートしていく必要があるのだと気づいたのです。

これまでの経験を活かし、二〇二一年度常任副委員長として実行していきたいことは、「学友会員のための学友会」を一心に目指すことです。学友会は学生の学生による学生のための自治組織です。全学友会員の「想い」が反映されてこそ、その結晶が正しき成果いわゆる「カタチ」になるものだと思います。以前、佐藤候補からこの組織についての理想を伺ったとき、それがあまりにも私の理想と目指すところを一にしていることに驚きました。とはいえ、組織の長だけがこれを望んだとしても、なかなか難しいものだと、瀧谷前常任委員長から伺いました。だからこそ、常任副委員長がその志を共にしていることは、大きな力となると考えます。また、副委員長が二人いることによって、より実務的にも動きやすく、常任委員長のサポート体制も磐石なものになると確信しています。私たちの理想を実現するため、以下三点を柱といたします。

一 アプローチを、変える。

学友会は全構成員自治を掲げ、代理徴収制度を用い、全ての学生に対して一律の学友会費を納入していただいております。しかし、二〇二〇年度の各学部委員長選挙の投票率を見ると、その理念とは程遠い数値が多く、学部で示されております。学生の声を大学に届けるという学友会の根本的な活動には、より多

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任副委員長選挙所信表明用紙

(五枚中の四)

くの学生の声が不可欠です。そこで、私は学生へのアプローチの見直しによって、これを改善したいと考えております。具体的には、四つのフェーズを想定し、①存在不認知層(そもそも知らない)②存在認知無関心層(知ってはいるが関心がない)③関心層(関心をもってている)④活躍層(組織の運用に携わる)という区分けを用意し、各フェーズに合ったアプローチを行っていきます。

二 交流の場を、創る。

私がこの組織からいただいたご恩とご縁の多くは、学園祭や中央パトリイダーズ研修といった、多学部間交流の場に因みます。一回生の頃から私のことを評価してくださっていた佐藤候補や中央事務局長をはじめとする先輩方、同期として共に歩んできた仲間たちとのご縁もまた例外ではありません。全学的な交流の場がもたらすつながりの多様化は高く評価されるべきです。よって私は、常任委員長をサポートする傍ら、このような交流の場が創れないかを模索いたします。現状のBCPレベルや昨今の情勢を鑑みるに、オンラインでの中央パトリイダーズ研修をひとつの案としてここに述べたいと思いますが、これについては中央パトリイダーズのニーズに沿ったものにしたいため、広く中央パトリイダーズの皆様からご意見を集めたいと考えております。

三 全学協議会に、挑む。

二〇二一年は全学協議会の年です。我々は学友会として、コロナ禍に大きく制限された学生の権利について、問いたださなくてはなりません。この年の全学協議会は、今にとって、そして未来にとって大きな意味をもつでしょう。学生の不満や意見をしっかりと捉えて発信することで、この組織の存在意義を未来へ繋げていかなくはなりません。前述したアプローチ方法の見直し、多学部間交流による横のつながりの強化は、全て全学協議会にプラスに働くと確信しています。準備期間も含め、私自身も積極的に常任委員長のサポートをさせていただきたいと思っております。

「学友会員のための学友会」を目指すことは、当たり前のように感じて難しいも

所信表明用紙

二〇二一年度中央常任副委員長選挙所信表明用紙

(五枚中の五)

のです。広い視野、高い意識、さらに深い理解が必要不可欠だからです。しかし、この理念が達せられたと感じるとき、そこには総体としての学友会の力強い意志が現れることとなります。私はその理想への一助となりたい、その一心で日々邁進してまいります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

以上を私の所信表明とさせていただきます。

投票日 二〇二一年三月二十六日

立命館大学学友会中央常任委員会

同選挙管理委員会